

## 論文

## アク・ベシム遺跡の土器編年試案

櫛原 功 一<sup>※</sup>

※ 帝京大学文化財研究所

はじめに

I. アク・ベシム遺跡の調査と土器研究史

II. アク・ベシム遺跡での年代測定

III. 土器の器種構成

IV. 土器群の検討

V. アク・ベシム遺跡の土器編年試案

おわりに

## はじめに

帝京大学およびキルギス共和国国立科学アカデミーでは、キルギス共和国に所在するアク・ベシム遺跡の共同調査を2016年より実施している。この遺跡は、玄奘三蔵の『大唐西域記』に登場する「素葉水城」(碎葉、スイヤブ)に比定され、中央アジアのシルクロード関連遺跡では著名な都市遺跡として知られる。

碎葉(スイヤブ)は5世紀代にソグド人の都市として出現し、6世紀に突厥が台頭すると、西突厥の本拠地となったといわれる。唐代には安西四鎮のひとつでもあった碎葉鎮が設置されるが、その所在地については、今日では「杜懷宝碑」の発見によりアク・ベシム遺跡の第2シャフリスタンに比定する見方が有力である。この碎葉鎮は、記録によれば679年に王方翼が築城し、686~691年には吐蕃、692~700年には唐が支配した。703年、突騎施による奪取以降、唐の直接統治はなく、719年には安西四鎮から外されたが、748年には、北庭節度使の王正見が征伐し、城壁が壊されたという。その後、この一帯にカラハン朝が進出し、960年に一斉にイスラム化すると、碎葉の都市機能はバラサゲン(アク・ベシム遺跡の南8kmにあるプラナ遺跡とされる)に移った。またカラハン朝は11世紀中ごろに東西分裂して、東の首都をバラサゲンとした。1132年頃には耶律大石が東カラハン朝を滅ぼし、バラサゲンを西遼(カラ・キタイ)の首都としたが、1210年、西遼はモンゴル帝国の侵攻で滅んだという。

このアク・ベシム遺跡では、ソ連時代からA.N. ベルンシュタムやL.R. キズラソフ、L.M. ヴェドゥータヴァらの著名な学者による発掘調査が、第1シャ

フリスタンの居住域やキリスト教会、ツイタデル、仏教寺院、第2シャフリスタンの仏教寺院などで実施されてきた。そうした調査のなかで、遺構の時期決定に際しては、遺構の様相や出土遺物を参照しつつ、出土したコインを重視する傾向があり、土器編年への依存度が高い日本の研究者からみると、年代決定のための拠りどころを欠くように映る。

日本の考古学的調査では、縄文時代以降、中近世に至るまで、時期推定を行う際に土器型式研究にもとづく土器編年が重視され、とくに古代では四半世紀から半世紀程度の時間幅で遺構の年代、集落変遷や土地利用の変化、周辺地域との交流などを分析する際の年代的基準とされている。一方、キルギス国内では土器の編年研究は低調で、日本とは土器研究のあり方が異なるようにみえるが、これには遺跡の形成過程や建物構造の違いが大きく反映すると考えられる。すなわちキルギスをはじめとする中央アジアでは、日干レンガによる建物構造を基本とし、居住面が積み重なって重層化した文化層の累積によってテルが形成される。つまり、遺構面や居住面の順番や新旧関係は自明なことから、時間軸としての土器への依存度、関心は低く、居住面を層位的に捉えにくい日本の遺跡とは、時間に対する認識や、遺構、遺物に対する扱い方が異なっている。さらに中央アジアにおける遊牧民の生活に関しては、定着性が低いことから生活痕跡は残りにくく、土器使用の実態把握は必ずしも明らかではない。したがって土器型式にもとづく土器編年研究は、とくに都市遺跡を対象とする場合、都市構造の把握や形成過程の解明のため、いっそう深化させる必要がある。

帝京大学によるアク・ベシム遺跡での4次にわたる調査では、各地点の包含層やピットなどから良好

な土器群を得、それらの遺構に伴う炭化物、もしくは土器の内外面に付着した炭化物を日本国内で年代測定した。それらの年代値は、土器が出土した遺構の構築年代や廃棄年代を推定するための情報となる。土器の型式研究に年代観を与えることで、アク・ベシム遺跡の土器編年（アク・ベシム編年）設定が可能となり、さらに今後、土器型式の時空的広がりを探り、広域的な土器編年の構築によって各地の土器の比較、検討が可能となれば、チュー川流域、中央アジアの考古学的研究はいっそう発展するものと確信する。とくにアク・ベシム遺跡は国際的な交易都市であるとともに、唐が進出して碎葉鎮を構築し、瓦葺きの基壇建物を建設したと考えられることから、在地の土器群とともに搬入された各地の土器や陶器類、あるいは外的な影響で作られた土器の存在が想定され、それらの実態解明は、アク・ベシム遺跡研究の大きな課題となる。

本稿では、アク・ベシム遺跡の土器編年のための基礎データを提示し、編年試案を提示するもので、この年代観を今後の調査に生かすとともに、日本では馴染みがない中央アジアの土器群の様相の一端を明らかにしたい。

## I. アク・ベシム遺跡の調査と土器研究史

アク・ベシム遺跡は第1シャフリスタン (SH1) と第2シャフリスタン (SH2)<sup>2)</sup> および周辺に点在する遺構群からなる複合遺跡である。日本、キルギス合同による2016年から2019年の調査では、SH1のAKB-13区、SH2のAKB-15区のほか、AKB-16区 (SH1 東壁)、17区 (SH2 南壁)、18区 (第2仏教寺院)、19区 (SH1 南壁) で発掘調査を重ねてきた。また帝京大学が着手する以前の2011年から2015年には、東京文化財研究所および早稲田大学の城倉正祥氏らによる調査がAKB-13区、14区 (SH2 東壁) で実施されている (東京文化財研究所ほか 2016、城倉ほか 2016・2017・2018)。

SH1は、5世紀～11世紀頃の都市遺跡で、街路や大通りに面し、日干しレンガ積みの壁で構築された居住施設群とともに、ツイタデルやキリスト教寺院跡があり、周辺には仏教寺院跡が存在する。一方、SH2は7世紀末～8世紀前半の唐の都城「碎葉鎮」とみられ、2017年からのAKB-15区中枢部内の調査では、瓦帯、基壇状遺構、花柄の石敷き(「卵石散水」、

磚を並べた雨落ち溝、廃棄坑などが確認された。瓦帯は、建物基壇の縁辺に瓦が帯状に二次堆積したものと考えられ、また敷石は雨落ち溝に沿った中庭の屋外装飾で、いずれも唐による碎葉鎮設置に伴う関連遺構とみられる。その後SH2は、カラハン朝時代に居住区として利用されている。

このアク・ベシム遺跡の土器研究に関しては、間舎裕生氏、山藤正敏氏、久米正吾氏 (間舎ほか 2016) および榊原の器種分類、土器編年に関する暫定的な試案 (榊原 2017、山内ほか 2018、帝京大学文化財研究所ほか 2019、山内ほか 2019) がある。

間舎氏らは、SH1の最上層の土器群を10世紀後半代 (カラハン朝時代) のイスラム化した段階の土器とみなし、「調理土器 (Cooking pot)」、「素製土器 (Plain ware)」、「磨研土器 (Burnished ware)」、「施釉陶器 (Glazed ware)」の4つに分類し、ケン・ブルン遺跡での採集品と比較した。ここでいう調理土器とは加熱に使用された土器で、胎土に大きめの鋳物粒を大量に含み、有頸、無頸がある。素製土器は壺形、鉢形で、混和材は少量、磨研土器は表面に光沢のある壺形、鉢形の土器、施釉陶器は白、褐、黒などの色釉で彩文が描かれた鉢、ランプ等で、その他、蓋、脚、器台をあげている。ケン・ブルン遺跡については、カラハン朝時代 (9世紀半ば～13世紀初頭) と、ポスト・カラハン朝時代の2時期があり、カラハン朝時代の土器を「小型鉢」、「壙」、「大型鉢」、「有頸壺」、「無頸壺」、「蓋」に分類し、ロクロ成形の無頸壺が多いことを指摘した。またポスト・カラハン朝時代の土器は、「大型鉢」、「胴部屈曲鉢」、「大型壺」に分類している。

山藤氏は、SH2中枢部のAKB-14区 (東壁) での層位的な調査・分析により出土した土器群を層位別に比較した。そこでは胎土・成形技法から9群に分類するとともに、型式構成や器種別組成、出土量について考察し、上層出土のカラハン期の土器群は、調理用土器を含むなど日常的な土器群であるのに対し、下層では土器量が少なく、器種が限られるなど官衙的な様相がある点を指摘した。また最下層のIV層に伴い出土した還元焰焼成の土器について、中国系と推測している (山藤 2017、城倉・山藤ほか 2017)。

さらに山藤氏は、2015年夏の調査でAKB-13区より出土した土器を同様に検討し、胎土、成形技法に

より、3群の土器群を追加するとともに、土器の器種分類については、「鉢」、「カップ」、「大型甕／壺」、「壺」、「調理用甕」、「水差し」、「蓋」とし、AKB-14区Ⅱ・Ⅲ層の土器群と比較した。その結果、① AKB-14区Ⅱ層、② AKB-14区Ⅲ層=AKB-13区第1層上層、③ AKB-13区第1層下層、の層位関係を確認し、3段階の土器群の変遷として整理した。また年代観については、AKB-14区第Ⅱ層をカラハン朝時代(10世紀頃)～ポスト・カラハン朝時代、同第Ⅲ層をカラハン朝時代(10世紀頃あるいはそれ以前)、同第Ⅳ層を5～8世紀頃と推定した(山藤2017)。

2017年度の報告および2018年度の概報で、櫛原は土器の器種とその変遷について、暫定的に第1期(10世紀)、第2期(9世紀)、第3期(8世紀後半)の3大別、5細分案を提示した(帝京大学文化財研究所ほか2019、山内ほか2019)。これはAKB-13区のピットや包含層での土器群の組合せをもとに、器種別の変遷過程を推定し、AKB-15区の土器群を第1期として加え、年代観を想定したもので、器種は「カップ」、「水差し(壺)」、「甕」、「鉢」、「土鍋」、「皿」、「蓋」、「支脚」、「脚付皿」、「蔵骨器」、「施釉陶器」に分け、カップ形土器や水差し形土器、鍋の変遷に時期的な変化を見出している。

櫛原はまた、2019年の調査でAKB-15区の1・3・7号ピットで良好な廃棄坑から多量の土器群が出土したことから、AKB-13区でのピットや包含層の資料にSH2のピット出土の資料を加え、年代測定値にもとづき、10～11世紀、8世紀後半～9世紀、7世紀末～8世紀初頭の3段階の土器群の変遷について整理した(櫛原2020)。しかしその後、年代測定分析の追加データが提示され(帝京大学文化財研究所ほか2020)、<sup>3)</sup> 見解の一部修正が必要となった。

## II. アク・ベシム遺跡での年代測定

アク・ベシム遺跡では、放射性炭素14年代測定を調査のつど実施しており、現在までに14地点で24試料が分析されている(表1)。

SH1では、ピット、包含層での分析例が14試料ある。2012年には東京文化財研究所により最上層が調査され、街路跡と建物群から出土した炭化材5点(試料1～5)の年代測定の結果、890～982cal AD、949～1020cal AD、856～970cal AD、772～

890cal AD、936～991cal AD(2δ較正暦年代範囲、以下同じ)を推定範囲とする較正暦年代値が得られている(東京文化財研究所ほか2016)。帝京大学による2017年の調査では、R2の炭化材1点(試料6)の同定および年代測定により、樹種はトウヒで、680～779cal ADの較正暦年代値が得られた(帝京大学文化財研究所ほか2019)。また2018年の調査では、R1で炭化材2点および生材1点(試料9・10・12)、R2で1点の炭化材(試料11)、R5で4点の炭化種実(試料13～16)の年代測定を実施し、R1では892～981cal AD、884～973cal AD、685～772cal AD、R2では685～779cal AD、R4では765～883cal AD、764～879cal AD、764～883cal AD、766～883cal ADの較正暦年代値が得られている(山内ほか2019)。

SH2では瓦帯およびピット3ヶ所で10試料を分析した。瓦帯中から採取された炭化材2点(試料7・8)の同定および年代測定によれば、2点とも樹種はトウヒで、610～660cal AD、561～639cal ADの較正暦年代値が得られている。この2点については建築材と推定され、年代値は樹木の伐採年代であるが、測定位置が最外皮ではないことと、古木効果を考えると記録上の碎葉鎮の時期と整合的である。したがって焼失による建物倒壊、その後の片付けによる瓦帯の形成を想定するうえで示唆的なデータとなった。

2019年の調査では、AKB-15区(SH2)の1号ピットで土器付着炭化物1点(試料22)、炭化材2点(試料17・23)、3号ピットで炭化種実2点(試料18・19)、炭化材1点(試料21)、土器付着物1点(試料20)、7号ピットで炭化材1点(試料24)の種実・樹種同定および年代測定を実施した。7号ピットは基壇状遺構の上面に掘り込まれた廃棄土坑であり、3号ピットは建物南面の石敷きを切るようにして重複する井戸状の縦坑である。その結果、1号ピットの試料はナシ亜科で967～1023cal AD、ヤナギ属で1065～1155cal AD、付着炭化物は1065～1155cal AD、3号ピットの種実はコムギで665～725cal AD、964～1025cal AD、炭化材はヤナギ属で947～1018cal AD、付着炭化物は975～1030cal AD、7号ピットはバラ属で985～1028cal ADという較正暦年代値が得られた。

1・3号ピットの土器付着炭化物は、煮炊き用の鍋の内外面付着のスス、コゲであり、推定年代は土

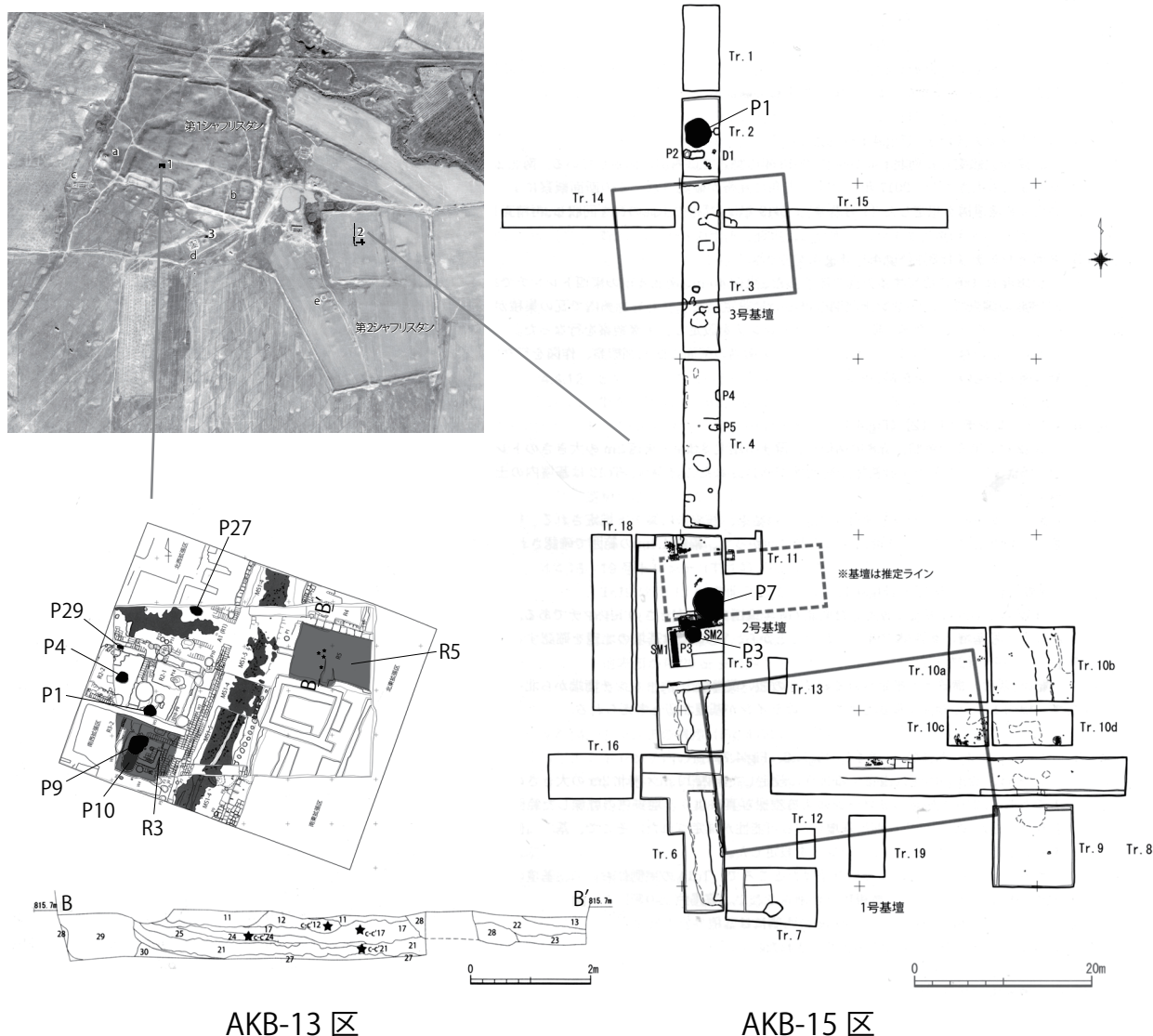


図 1. アク・ベシム遺跡の調査区（断面図星印は年代測定試料採取地点）

器の最終的な使用年代とみなしうる。また、同じ遺構出土の多量の土器の廃棄年代は、一時期あるいは順次堆積の可能性があるが、ここではほぼ同時期と考えておく。また3号ピットでは、水洗選別により得られた炭化種実を試料としているが、種実類の分析では、長期保存を考慮しなければ収穫時期と被熱、焼成時期はごく近いと考えるのが自然で、ピットが埋没した年代を鋭敏に示唆する。ただし、炭化種実は小さく、軽いことから、ピットの埋没過程で周囲にあった炭化物が混入する可能性が大といえる。それに対し建築材を試料とした分析では、伐採時期と建築時期の間に時間差が想定され、また測定部位が外皮でない場合、年輪分の誤差が生じる。

1号ピットでは、土器内部の炭化物と炭化材がと

もに11世紀後半～12世紀前半となり、アク・ベシム遺跡での最新の推定年代値を示している。3号ピットでは、7世紀後半～8世紀と、10世紀後半～11世紀初頭の二つの年代観が得られたが、4点中3点が後者の年代であること、出土した土器群は1、7号ピット出土土器に類似することから、遺構の埋没時期は11世紀初頭以前といえる。7～8世紀の炭化種実の混入については、前述の理由から埋没過程での混入とみられるが、唐が官衙を構築したとされる碎葉鎮の年代と整合的な点は注目すべきで、唐代の人々の食生活の反映とみることもできるほか、碎葉鎮を巡る攻防史をうかがわせるものと理解できよう。また7号ピットは1点のみの分析ではあるが、3号ピットとほぼ同時期の10世紀後半～11世紀初頭

表1. アク・ベシム遺跡の放射性炭素年代測定値

試料No.	測定番号	遺跡データ	試料データ	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	<sup>14</sup> C年代 (BP±1σ)	<sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代範囲		報告
						1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲	
1	NUTA2-19926	SH1 A1-3	炭化物		1114±20		890-982 cal AD (95.4%)	東京文化財研究所ほか 2016
2	NUTA2-19927	SH1 A1-8	炭化物		1066±20		900-922 cal AD (10.9%) 949-1020 cal AD (84.5%)	東京文化財研究所ほか 2016
3	NUTA2-19928	SH1 A1-27	炭化物		1149±20		776-792 cal AD (6.9%) 802-845 cal AD (11.2%) 856-970 cal AD (77.4%)	東京文化財研究所ほか 2016
4	NUTA2-19929	SH1 A1-46	炭化物		1185±20		772-890 cal AD (95.4%)	東京文化財研究所ほか 2016
5	NUTA2-19930	SH1 A1-48	炭化物		1096±19		894-931 cal AD (38.5%) 936-991 cal AD (56.9%)	東京文化財研究所ほか 2016
6	PLD-35862	SH1 R2 3層 No.484	炭化材(トウヒ属)	1248±20	1250±20	695-701 cal AD (5.2%) 710-746 cal AD (51.7%) 764-773 cal AD (11.3%)	680-779 cal AD (86.5%) 791-805 cal AD (2.7%) 811-828 cal AD (2.3%) 839-864 cal AD (3.9%)	帝京大学文化財研究所ほか 2019
7	PLD-35863	SH2 R27	炭化材(トウヒ属)	1403±19	1405±20	631-657 cal AD (68.2%)	610-660 cal AD (95.4%)	帝京大学文化財研究所ほか 2019
8	PLD-35864	SH2 R35	炭化材(トウヒ属)	1469±17	1470±15	574-615 cal AD (68.2%)	561-639 cal AD (95.4%)	帝京大学文化財研究所ほか 2019
9	PLD-36818	SH1 R1 No.45	炭化材(ナシ亜科)	1112±17	1110±15	898-925 cal AD (34.1%) 945-970 cal AD (34.1%)	892-981 cal AD (95.4%)	山内ほか 2019
10	PLD-36819	SH1 R1 No.46	炭化材(ヤマナラシ属)	1131±16	1130±15	891-902 cal AD (14.0%) 920-962 cal AD (54.2%)	884-973 cal AD (95.4%)	山内ほか 2019
11	PLD-36820	SH1 R2 P29	炭化材(ナシ亜科)	1244±16	1245±15	695-700 cal AD (3.5%) 710-745 cal AD (51.8%) 764-774 cal AD (12.9%)	685-779 cal AD (87.4%) 791-805 cal AD (2.6%) 812-826 cal AD (1.8%) 839-862 cal AD (3.6%)	山内ほか 2019
12	PLD-36821	SH1 R1 P27	生材(トウヒ属)	1263±17	1265±15	690-730 cal AD (44.5%) 736-750 cal AD (15.4%) 761-769 cal AD (8.3%)	685-772 cal AD (95.4%)	山内ほか 2019
13	PLD-37462	SH1 R5 12層	炭化種実	1223±19	1225±20	725-739 cal AD (11.4%) 788-778 cal AD (10.6%) 791-828 cal AD (27.4%) 839-864 cal AD (18.9%)	711-745 cal AD (18.3%) 765-883 cal AD (77.1%)	山内ほか 2019
14	PLD-37463	SH1 R5 17層	炭化種実	1228±19	1230±20	719-742 cal AD (21.7%) 766-778 cal AD (12.4%) 791-806 cal AD (11.0%) 812-826 cal AD (8.3%) 840-863 cal AD (14.8%)	694-746 cal AD (29.2%) 764-879 cal AD (66.2%)	山内ほか 2019
15	PLD-37464	SH1 R5 21層	炭化種実	1224±22	1225±20	723-740 cal AD (12.8%) 767-779 cal AD (10.0%) 790-829 cal AD (26.3%) 838-866 cal AD (19.0%)	695-700 cal AD (1.0%) 710-745 cal AD (20.0%) 764-883 cal AD (74.4%)	山内ほか 2019
16	PLD-37465	SH1 R5 16層	炭化種実	1219±19	1220±20	730-736 cal AD (4.7%) 769-778 cal AD (9.3%) 790-829 cal AD (31.6%) 838-865 cal AD (22.5%)	718-743 cal AD (12.1%) 766-883 cal AD (83.3%)	山内ほか 2019
17	PLD-39432	SH2 P1 CNo.81	炭化材(ナシ亜科)	1056±19	1055±20	985-1015 cal AD (68.2%)	906-916 cal AD (2.8%) 967-1023 cal AD (92.6%)	帝京大学文化財研究所ほか 2020
18	PLD-39433	SH2 P3 19層	炭化種実(コムギ)	1296±22	1295±20	672-710 cal AD (44.9%) 746-764 cal AD (23.3%)	665-725 cal AD (62.4%) 739-769 cal AD (33.0%)	帝京大学文化財研究所ほか 2020
19	PLD-39434	SH2 P3 19層	炭化種実(コムギ)	1051±23	1050±25	986-1017 cal AD (68.2%)	902-920 cal AD (4.7%) 964-1025 cal AD (90.7%)	帝京大学文化財研究所ほか 2020
20	PLD-40147	SH2 P3 CNo.70	土器外面付着スス	1030±24	1030±25	994-1020 cal AD (68.2%)	975-10230 cal AD (95.4%)	帝京大学文化財研究所ほか 2020
21	PLD-40148	SH2 P3 CNo.70	炭化材(ヤナギ属)	1074±19	1075±20	906-916 cal AD (9.7%) 968-998 cal AD (51.6%) 1005-1012 cal AD (7.0%)	900-923 cal AD (17.6%) 947-1018 cal AD (77.8%)	帝京大学文化財研究所ほか 2020
22	PLD-40149	SH2 P1 CNo.81	土器内面付着コゲ	956±22	955±20	1028-1048 cal AD (22.0%) 1088-1122 cal AD (36.4%) 1139-1149 cal AD (9.8%)	1022-1059 cal AD (29.1%) 1065-1155 cal AD (66.3%)	帝京大学文化財研究所ほか 2020
23	PLD-40150	SH2 P1 CNo.81	炭化材(ヤナギ属)	952±21	950±20	1029-1048 cal AD (19.3%) 1086-1123 cal AD (37.9%) 1138-1149 cal AD (11.0%)	1023-1059 cal AD (27.0%) 1065-1155 cal AD (68.4%)	帝京大学文化財研究所ほか 2020
24	PLD-40151	SH2 P7 CNo.130	炭化材(バラ属)	1027±20	1025±20	995-1021 cal AD (68.2%)	985-1028 cal AD (95.4%)	帝京大学文化財研究所ほか 2020

であり、出土した土器群も1・3号ピットに類似したものが多く。

以上のAKB-15区のデータを整理すると、1号ピットの出土土器、および遺構の年代は11世紀後半～12世紀前半、3・7号ピットは10世紀後半～11世紀前半で、3・7号ピットはほぼ同時期、1号ピットは1世紀程度新しく、本遺跡では最新段階の土器様相といえる。

### Ⅲ. 土器の器種構成 (図2)

AKB-13区 (SH1) の調査では、これまでに3～4面の建物床面を検出し、包含層や床面、あるいは床面 (または覆土中) を掘り込み面とするピットから8～10世紀代の土器が出土した。一方、AKB-15区 (SH2) では碎葉鎮とみられる遺構面に伴う焼失後の片付けにより形成された瓦帯中より、建築材とみられる炭化材の分析で7～8世紀の年代が得られ、

碎葉鎮と推定される年代を検証するデータとなった。さらに基壇状遺構および周辺の廃棄坑（1・3・7号ピット）などから、カラハン朝時代の10～12世紀代の極めて良好な土器群が出土し、年代測定によって時代性が明らかになっている。

ここではまず、AKB-13区と15区の調査成果を統合することによって、8世紀から12世紀のアク・ベシム遺跡の土器群の器種構成を整理し、土器編年について考えてみたい。

土器類は大きく無釉タイプ（白色掛け[白色ウオッシュ]を含む）と施釉タイプ（施釉土器）に分かれる。無釉タイプは器形・用途によりカップ、壺、甕、鉢、鍋、皿、蓋、円卓、碗、脚付皿、深鉢、支脚などに分類され、カップ、壺にはいわゆる精製土器を含むほか、火にかける鍋の多くは胎土中に混和材の砂粒を多く含み、粗製の胎土を呈している。また壺、甕等の土器は表面がごく薄い白色を呈し、その要因は定かでないが、白色化粧土の塗布の可能性はある（白色掛け）。施釉タイプには碗、皿、壺、ランプ等があるが、陶器というよりは無釉タイプと同程度（900℃程度）の比較的低温で焼成された土器で、胎土は赤味を帯びた色調を呈するものが多い。器面にはペルシャ文字が描かれるなど、多くは搬入品と考えられる。

カップ：胎土は緻密、精選土で、ロクロ成形、把手を体部にもつカップで、表面にヘラ磨きを加えたものがある。坏部の形態には坏形、鉢形、壺形などがある。

A：やや浅い坏（碗）形。

B：坏部から口縁が直立ぎみに立ち上がる。

B1：坏部が丸い肩をもち、境（頸部）に明瞭な括れがある。

B2：頸部の括れがほとんどなく、屈曲した頸部から口縁が外反する。

B3：B2に類似した器形で、口縁がさらに長い。

B4：小形で、底部が厚く、高台状を呈する。

C：壺状で頸部に括れがあり、器高がある。

C1：C2よりは小形で、頸部の括れが大きい。

C2：頸が長く、長頸壺Cに類似したジョッキ形。

D：頸部が「く」の字に内折した鉢形。

壺：ロクロ成形で、胎土は精製～並、丸味をもった体部から頸部が伸び、把手をもつもの、無頸のもの、斜めの頸部をもつものがある。片口、注口をもつもの、もたないものがあるが、いずれも水差しとみられる。白色掛けしたものが多い。

長頸壺：胴部がやや長く、頸部はやや太い。口縁部から肩部に把手をもつ。

A：口縁部が内折し、口縁部には数条の条線が巡る。

A1：口縁部に片口をもつ。

A2：肩部より注口が立ち上がる。

B：体部が丸く、器高が高い。

C：カップC2に類似するがやや大きい。

細頸壺：頸部は細く、肩部に文様帯をもつ。口縁部から肩部に把手をもつ。

短頸壺：頸部はやや短く、太い。肩部に把手をもつものがある。

A：頸部はやや短く直立し、内外面に煮沸痕をもつことがある。

B：中型の壺で、器形は甕に似る。

C：短頸壺Bを小型化したもので、把手をもつ例がある。

斜頸壺：ロクロ成形の球胴形で、頂部を塞ぎ、肩部に孔を開け、別作りの頸部を接合し、口縁部から体部中央に把手を付ける。

無頸壺：体部が丸く、頸部がほとんどなく、煮沸痕をもつことがある。

甕：大形甕で、器壁は厚く、口唇部に装飾をもつことがある。把手はない。手捏ね、ナデ整形で、表面に薄く白色掛けしたものがある。

A：胴部は丸みをもち、口縁部は短い。

A1：口縁断面形は丸または角口縁で短い。

A2：口縁部は細長く屈折、外反する。

B：体部は寸胴で、頸部がなく、口縁は肥厚する。

鉢：ロクロ成形の鉢で、胎土は精製～並。

A：口縁部が直線的に開き、口唇部の面に櫛歯波状文などをもつ大形で桶状の鉢。

B：鉢Aに類似するがやや小形で、口縁部が直線的に開き、口唇部に面をもつ。

C：口縁部は丸く内湾し、口縁に1～2条の沈線をもつ。

C1：体部が直線的で、口縁部は内湾し、底部が重厚に作られる。

C2：体部が丸く、口縁部はやや強く内湾する。

D：体部はやや丸く、口縁部が有段となる。

D1：体部はやや丸い。

D2：体部はやや直線的に外反する。

鍋：手捏ねの煮沸具で、内面に指頭痕を残す。胎土に粗い混和材を多く含む。

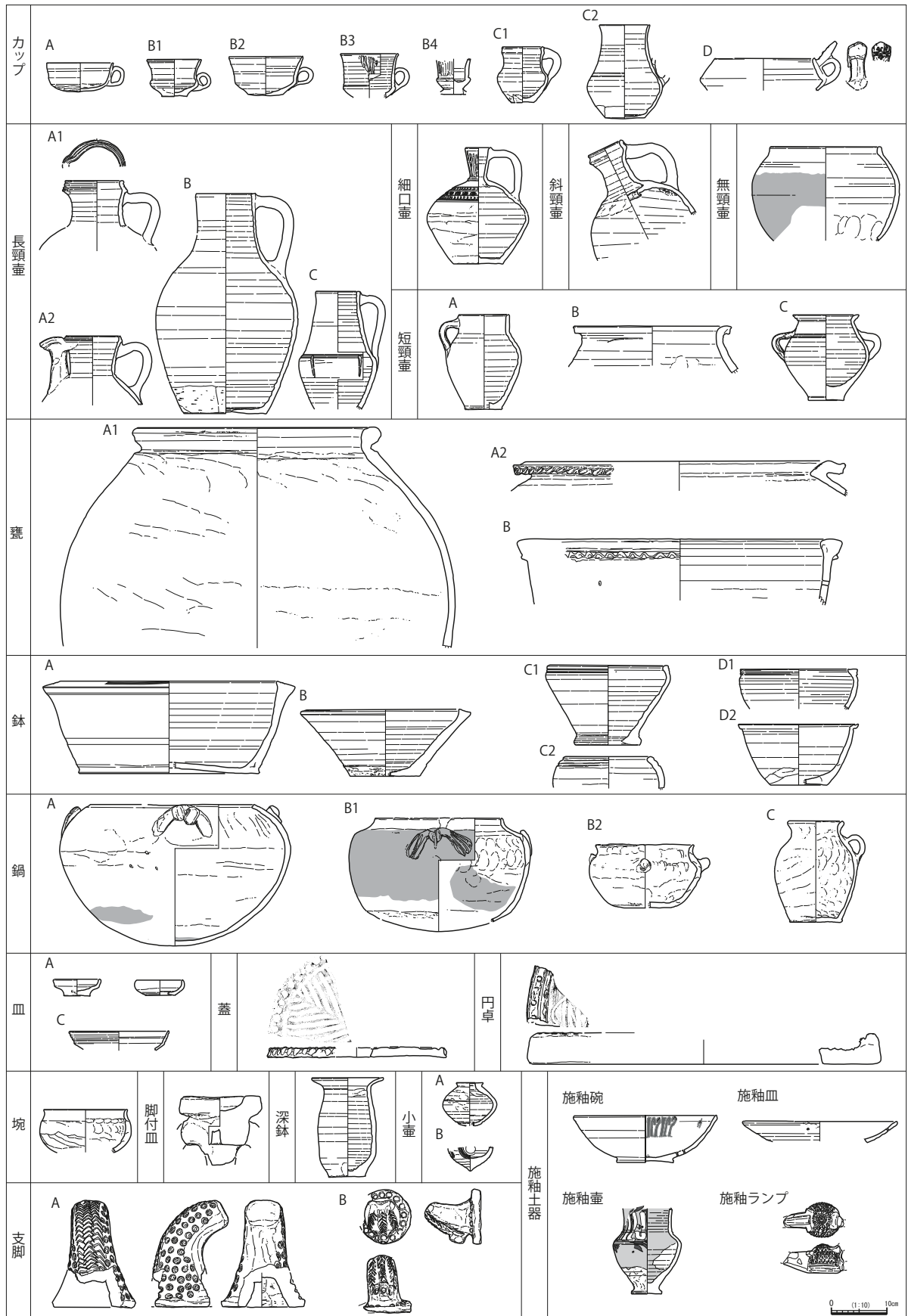


図2. アク・ベシム遺跡の土器の器種分類

A：無頸、丸底の内湾した鉢形で、肩部に把手状の貼付文をもつ。

B：口縁に立ち上がりがある。

B1：丸底で、肩部に貼付文をもつ。鍋Aに口縁部を付加したような形となる。

B2：小形、粗製で、肩部に貼付文をもつ。底部は平底とみられる。

C：肩部に把手をもつ粗製、壺形で、底部は平底。

皿：小形で、胎土は精選～並。

A：口縁部が短く立ち上がり、底部に厚みがある。

B：口縁部が丸く内湾する。

C：体部が屈折、外反し、口縁部に条線をもつ。

蓋：手捏ねの小形円板形で、中央に把手をもつ。把手および円板上面には沈線文、周縁にキザミや刺突列をもつものが多い。また把手は棒状、U字状があり、摘み部の形態にも多種がある。胎土には混和材を多く含み、裏面にはススが付着することから煮沸具または竈の蓋とみられる。大きさには大小がある。

円卓：手捏ね、直径約50cmの大形、円板形で、器壁は厚みもち、周縁を形成し、中央には円筒形高台をもつ。表面にスタンプ文などで装飾文様もち、裏面は良く磨かれ、スス付着はない。反転してテーブル（円卓）として使用したとされる。

碗：碗形で、口縁部が短く直立する。手捏ねで、内面に指頭痕をもつ。鍋B2に似る。

脚付皿：厚みのある平縁の小形皿に3本の脚部をもつ燭台。手捏ねで、皿面は良く磨かれる。

深鉢：円筒形で口縁部がやや長く伸びた土器。子供用尿瓶といわれ、外面に薄く白色掛けを施す。

小壺：球形または紡錘形の小形の壺。ロクロ成形で胎土は精製。

A：球形、丸底で上面に小さな口が開く。

B：紡錘形で底部が尖り、色調は緑色、精選された特殊な粘土を用い、極めて硬質。外面に同心円状の装飾をもつ。Spherical Cone（球錘）といわれるカラハン朝時代に特徴的な薬品壺。

支脚：炉に鍋を掛けるため3個1組で用いたと考えられる支脚。緩やかに反って湾曲した角状で、背面を中心に装飾文様もち、顔面表現をもつものがある。胎土は粗い。

A：大形で、反って湾曲し、底面は窪んで中空となる。

B：小形で、反りは弱く、底面は中実で円板状と

なる。

施釉土器：ロクロ成形もしくは型作りで、胎土は精製、褐色で、内外面に釉による文様をもち、搬入品とみられる。

施釉碗：内面は白色釉地に黒色釉でペルシャ文字などの文様を描く。

施釉皿：皿形で、内面に放射状の文様などをもつ。

施釉ランプ：体部はドーム状で口が細長くのび、把手をもつ。型作りで、型押文様をもち、緑釉を施釉する。

施釉壺：頸部から体部上半にかけて施釉による文様をもつ。

その他：蔵骨器、ちりとり形土器、土鈴、二股土管、半円筒土管などがある。蔵骨器は蓋つきの楕円形を呈した容器で、外面に沈線文様をもつ。ちりとり形土器は三角形で、二辺に縁を持ち、内面および縁の外面に円形刺突文をもつ。土鈴は球状で、下部にスリットをもつ。二股土管は円筒形で二股に分かれている。半円筒土管は丸瓦に類似した半円筒の土製品で、樋として使用したとみられる<sup>4)</sup>。

#### IV. 土器群の検討

(1) AKB-15区1号ピット（11世紀後半～12世紀前半、図3）

1号ピットは土器を多量に出土した廃棄坑で、前述のとおり、3点の年代測定の結果、11世紀後半～12世紀前半の標識資料と考えられる。器種には、カップ、長頸壺、細口壺、短頸壺、斜頸壺、無頸壺、鉢、鍋、甕、蓋のほか、ちりとり形土製品、小壺、肩部に注口をもつ横向きの把手を付けた長頸壺などがある。細頸壺、無頸壺、短頸壺A～C、斜頸壺の存在が特徴的で、細口壺の肩部に波長の長い櫛描波状文を施文した例を含む点は特徴的といえる。底部は糸切り痕を残した例が多い。長頸壺Cでは肩部文様帯下部に垂下沈線（縦筋文）を施文するが、これは3・7号ピットにも認められる。鉢はA～Dの各種がある。鍋はA、Bがあり、平たい逆U字形で押圧文をもつ把手状装飾を貼付する。甕は口唇部に連続刺突文の装飾例が目立つ。蓋は周縁にキザミがあるが、表面無文となる。



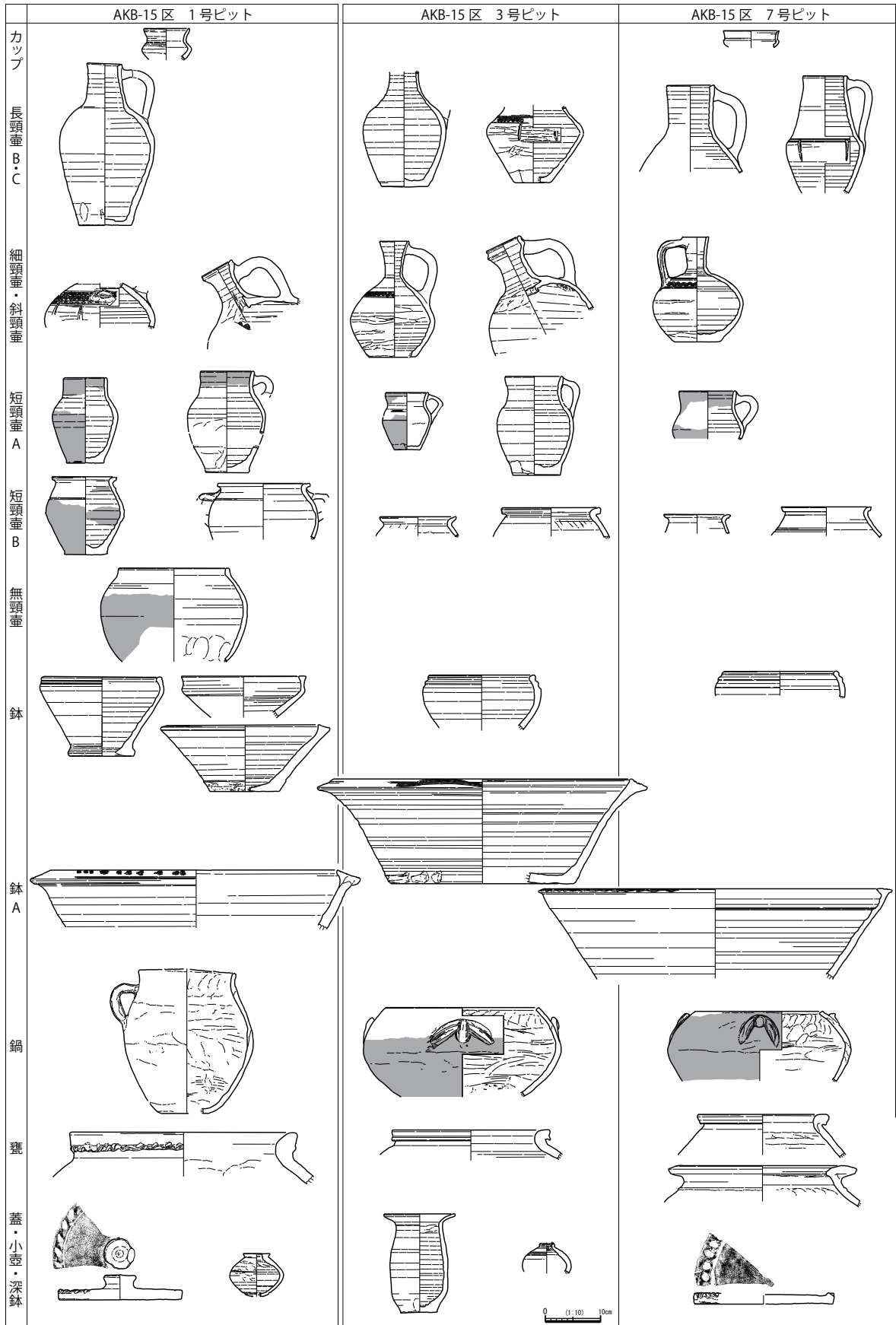


図3. AKB-15区1・3・7号ピットの土器

	カップ	長頸壺	短頸壺	細頸壺	甕	鉢	鍋	蓋・円卓	他
P9									
P10									
R3-2 面 (覆土)									
R3-2 面 (床直)									
R3-3 面									

0 (1:10) 10cm

図 4. AKB-13区R3の土器

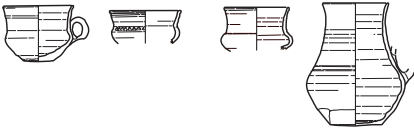


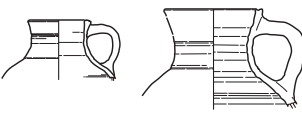
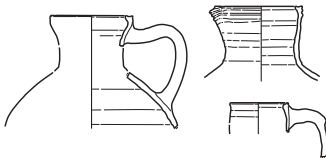
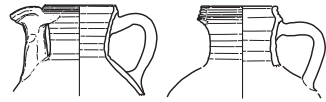
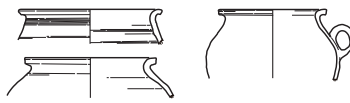

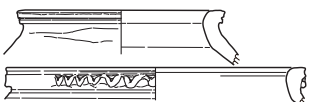
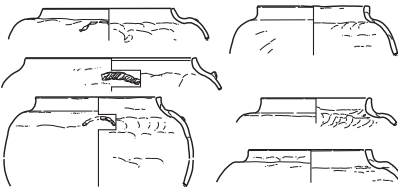
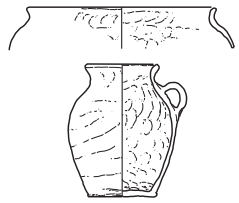
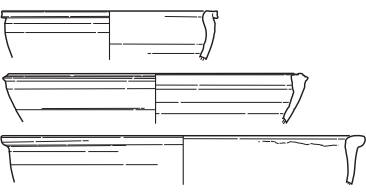
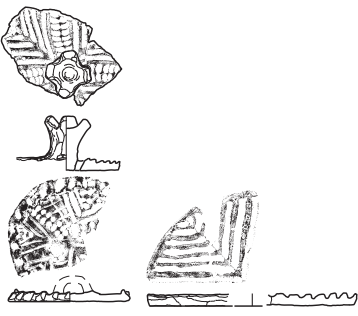

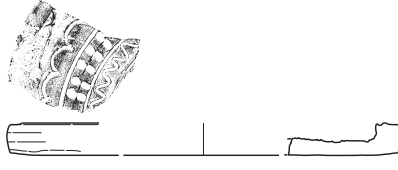




	AKB-13 区 R5	AKB-13 区 1号ピット	AKB-13 区 4号ピット
カップ			
長頸壺			
短頸壺			
甕			
鍋			
鉢			
蓋			
土壺			
土甕			

図 5. AKB-13 区R5、1・4号ピットの土器

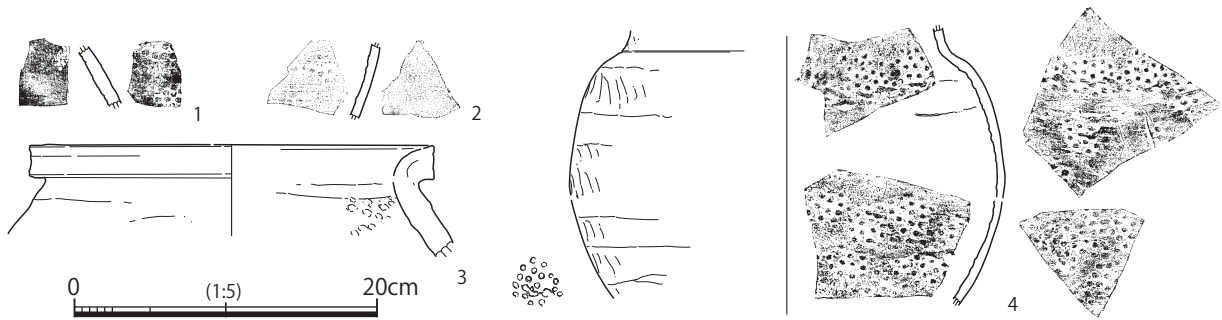


図6. 楕円粒文土器

(2) AKB-15区3・7号ピット（10世紀後半～11世紀前半、図3）

3・7号ピットも1号ピット同様に良好な一括資料で、前述したように、年代測定の結果から両者は10世紀後半から11世紀前半を示し、この時期の標識資料としたい。

1号ピットと基本的に同じ土器組成であるが、そのほかに深鉢、二股土菅等がある。細頸壺では肩部の2条沈線間に1段の櫛描波状文をもつものが多く、1号ピットに比べると波長が短い波状文を主とする。短頸壺B・Cは肩部に1条の沈線をもつものが多い。甕は口縁部に装飾文様がない傾向がある。鍋は無頸のAを主とし、把手は平たい逆U字形で、把手中央に縦のナデを加える。鉢はC2のみがあり、口縁部に2条の沈線を引く。蓋は1号ピット同様に表面無文となり、量的には少ない。底部には糸切り痕を残し、外面底部付近をヘラ削りする例が目立ち、1号ピットと異なる整形技法といえる。

(3) AKB-13区R3（9世紀～10世紀、図4）

AKB-13区では、同一区画（部屋、R）で壁構造を維持したまま数面の床面が重なる状況があり、上から1面目、2面目と呼称して調査を進めている。R3は、2015年以前に上層で建物遺構（ユニット3、R3-1面）および小路（B1-104）が調査されていたが、2016年の調査ではその直下より獣骨が出土した不整形の9号ピット（P9）が検出された。また約30cm下層に竈をともなう石敷き面（R3-2面）があり、さらにその下層には日干しレンガ敷きの床が存在し（R3-3面）、甕を逆位埋設した竈をともなっている。さらにR3-1面下層から掘り込まれた大形の10号ピット（P10）が、R3-2面、R3-3面を掘り込んで構築されている。各面には床直もしくはそれに近い出土遺物、床面を埋める土層から遺物が出土し、若

干の時間差が存在する。

以上の各遺構の年代順は、上層よりR3-1面、P9、P10、R3-2面、R3-3面となる。

これらの年代観については、R3-1面をAKB-13区の最上面の時期とみなし、試料2の分析結果を参考に10世紀後半～11世紀前半と仮定する。またR3-3面を試料11・12の分析結果を参照に、8世紀後半とすると、P9、P10、R3-2面は概ね9世紀～10世紀前半とみなすことが可能となる。土器群の器種組成は良好とはいえないが、P9、R3-2床直に細頸壺が存在するほか、P9、P10にカップD、P10に円卓が存在する。またR3-2覆土に口縁がわずかに屈曲した長頸壺B、P10の長頸壺頸部に微隆起線をもつ例、交互沈線をもつ例があり、当該期の特徴といえる。

(4) AKB-13区R5（8世紀後半～9世紀、図5）

AKB-13区R5では、最上層に東西の小路（A3-215）が存在し、R4には建物（ユニット4）が存在した。2018年の調査のさい、その下層を掘り下げたところ、R4・5では土器群を比較的多く含む埋め土層が確認され、その状況からゴミや汚泥等を廃棄した区画と考えられた。R5での採集試料を年代測定したところ、8世紀後半～9世紀後半と推定されたことから、R5出土の土器群を当該期の標識資料としうる。

土器群の器種構成は、11世紀段階以降と異なる点として、斜頸壺や細頸壺、無頸壺、鉢Aを欠くほか、卓、支脚が存在する。短頸壺ではAの存在が希薄となる。鍋は口縁部が立ち上がるAが多い点は特徴的で、肩部の貼付文は連続押圧をもつ細い逆U字文を主とする。また蓋は、文様やつまみの形状が沈線文、刺突文などで装飾され、11世紀以降との違いが際立っている。

#### (5) AKB-13区1・4号ピット(8世紀前半以前、図5)

AKB-13区の1・4号ピットは、ともにR2内の床面に掘り込まれた、袋状を呈した深いピットで、屋内貯蔵施設とみられ、年代測定は実施していないが、床面のレベルや層位から8世紀前半以前と推定する。

また、この時期の土器を考える上で、還元焰焼成で内面に楕円粒の当て具痕をもつ灰色の硬質土器(仮称「楕円粒文土器」)の存在が注目される(図6)。SH1のAKB-13区では、これまでに4点の楕円粒文土器の出土例があり、3号ピット(R2-2)には小破片ながら1点存在する(2)。隣り合う4号ピット(R2-2)では、8世紀以降の細頸壺とともに楕円粒文土器の大形破片が出土し、壺形土器として図上復元された(4)。また10号ピット(R3-1)では、8～9世紀代の土器に伴って1点の小破片が出土し(1)、R3-3覆土からは甕A1の内面に当て具の楕円粒文が認められた(3)。それらは、叩き技法、還元焰焼成技法を用いることから、アク・ベシム遺跡では異質な存在である。これらについては、山藤氏が「中国系」と推定したAKB-14区(東壁)下層出土の還元焰焼成の土器との関連性がうかがえる。したがって、楕円粒文土器を7世紀末～8世紀前半と仮定しておきたい。

1・4号ピットの土器群は、カップ、長頸壺A、皿C、鍋、蓋、支脚A・Bからなる。カップはA、B1、C1などの各種がある。長頸壺A2は特徴的で、この器種はAKB-13区2号ピットにも存在している。カップ、長頸壺、皿の口縁整形が丁寧、繊細で、とくに長頸壺は屈折した口縁部に数条の沈線をもつが、そうした特徴は皿にも見出すことができ、同じ製作技法で作られた一群のまとまりをもつ土器様式がうかがえる。蓋は表面に綾杉状沈線文を描いたものである。

#### V. アク・ベシム遺跡の土器編年試案(図7)

ここでは土器の器種構成にもとづき、各器種を時間軸の系譜上に配置し、7世紀～12世紀の土器編年として仮に提示する。前述の土器群の年代観は、放射性炭素年代測定値によるため時間軸の区切り幅は一定でないが、ここでは約100年単位の区切りとし、アク・ベシム遺跡の土器編年試案としたい。なお、

最も新しい段階を仮にI段階とし、I段階からV段階までの設定とするもので、今後下層に古い土器群が出現することが予測されることからVI、VII…として段階を追加する予定である。また将来的には最終面までの調査完了後、段階番号を古い時代順にI期から付け直したいと考える。段階区分と対応する遺物、年代試料は以下ようになる。

アク・ベシム I 段階 (11世紀後半～12世紀前半、AKB-15区1号ピット、試料17・22・23)

アク・ベシム II 段階 (10世紀後半～11世紀前半、AKB-15区3・7号ピット、試料18～21)

アク・ベシム III 段階 (9世紀後半～10世紀前半、AKB-13区R3)

アク・ベシム IV 段階 (8世紀後半～9世紀前半、AKB-13区R4・5)

アク・ベシム V 段階 (7世紀後半～8世紀前半、AKB-13区2017-1・4号ピット)

土器群の変遷とアク・ベシム遺跡の歴史的時代に対応させると、I～III段階はカラハン朝時代(I・II段階はイスラム化後のカラハン朝時代)、IV段階はカラハン朝前時代(ポスト碎葉鎮期)、V段階は唐支配の碎葉鎮時代となる。

I・II段階とIII～V段階の土器群を比較すると、I・II段階では長頸壺C、細頸壺、斜頸壺、短頸壺A、鉢A、深鉢、小壺の存在が特徴的であるほか、鍋は無頸のAが主体的で、鉢の器種が多いこと、支脚を欠くことがあげられる。III～V段階では、長頸壺C、斜頸壺、短頸壺A、深鉢、小壺を欠くが、III期には細頸壺、鍋Aが存在する。鍋はIV、V期では鍋Bが主体的な点を考え合わせると、III段階は過渡的な時期といえる。

IV・V段階に存在する支脚に関しては、それ以降(I～III段階)に確認できないことから、炉で支脚を用いた調理スタイルが竈へと変化したことを意味する。また支脚側面には獣面らしき文様を施文するが、これは何らかの信仰的なモチーフとみられ、興味深い。カラハン朝時代以降、とくにイスラム化以降は支脚がなくなるのは、調理スタイルが変化したためであろう。また蓋の表面の装飾文がI～III段階に簡素化されるのも、支脚の欠落との連動性がうかがえる。一方、I・II段階の斜頸壺や細頸壺の胴部の縦筋文、斜頸壺、細頸壺の肩部や鉢A口縁部の櫛描波状文は、III～V段階には存在せず、II段階になって発達したモチーフといえる。

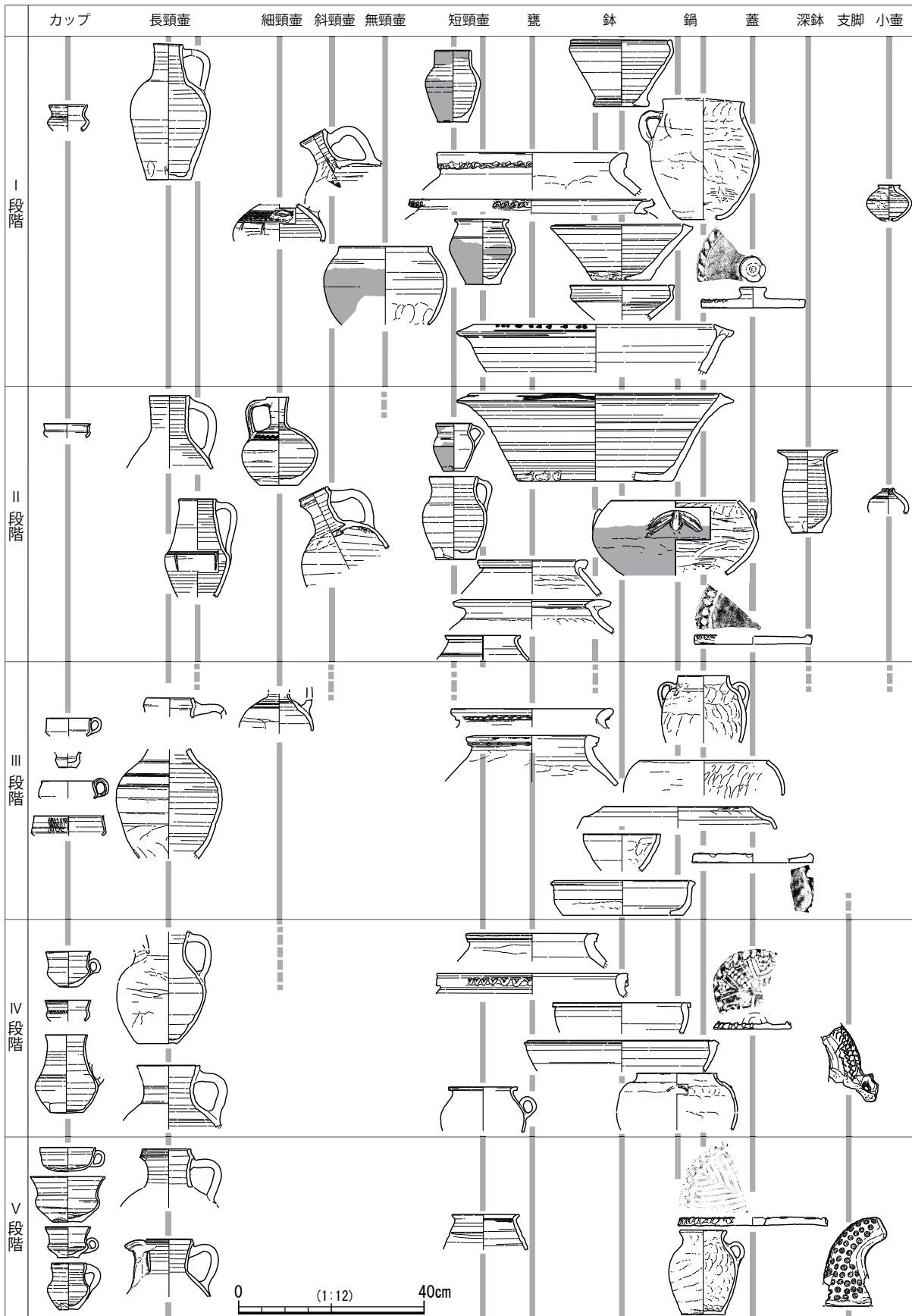


図 6. アク・ベシム遺跡の土器変遷図

土器の胎土、機能に注目すると、煮沸具としての鍋はⅠ～Ⅴ段階にA～Cが存在し、粗い砂粒の混和材を多く含み、手捏ね成形を特徴としているが、Ⅰ、Ⅱ段階ではロクロ成形の通常の胎土の短頸壺Aが、煮沸用土器として日常的に利用されたことが、土器外面のスス付着によってわかる。この点もⅠ・Ⅱ段階での変化である。なお、Ⅴ段階に関しては、還元焰焼成の楕円粒文土器が少数ではあるが存在する。瓦の焼成技法との関連性がうかがえるものの楕円粒文土器の方が硬質であり、在地の土器との違いがきわだっていて、搬入品の可能性がある。またロクロ成形のカップや長頸壺には、Ⅰ～Ⅳ段階とは違った丁寧な製作技法が見出され、周辺地域の影響下で製作された土器群の可能性もある<sup>5)</sup>。ただ、現状では7世紀以前の土器の様相が明らかではなく、下層の調査に期待がかかるとともに、碎葉鎮とされるSH2での7世紀代の土器様相の解明が俟たれる。

このようにⅢ段階を過渡期としてⅠ・Ⅱ段階と、Ⅳ・Ⅴ段階の土器様相に変化を見出すことができ、土器の使用方法や調理法の変化、土器生産集団や生産体制の変化などに応じた現象といえる。今後の課題として土器の使用方法などの機能研究が求められるが、現時点ではアク・ベシム遺跡の土器変遷を概観するなかで、10世紀後半以降のイスラム化による歴史的経緯の反映を認めうることを指摘するにとどめたい。

## おわりに

アク・ベシム遺跡は、ソグド人の都市と唐の軍事拠点の2地区に大きく分けて考えることが妥当であるならば、都市的機能や構造、役割や居住者の人種的な構成や年齢層、男女比は大きく異なっていたと思われる。前者は定住化した商人の居住区で、さまざまな国籍の人々が入り住みだしたであろう地区であり、後者は唐から一時的に入植した中国人の軍人を主体とした官衙地区で、当然ながら食料、食物の内容や、調理方法、使用された食器や調理器具などの食習慣には大きな差異があったとみるべきである。さらに、10世紀後半とされるイスラム化の前後で食習慣は大きく異なることが考えられるとともに、キリスト教、仏教、ゾロアスター教など、様々な宗教が存在したことから、宗教による食習慣の違いが重なる。そのうち、イスラム化を境とした土器組成の

変化については、今回の編年作業を通じて明らかになりつつあるといえる。今回はあくまでも土器編年を目的とした作業であったが、今後は器種構成や土器の由来を検討するとともに、炭化種実や穀類から解明されつつある植物利用、獣骨分析から推定される乳製品の加工や調理、肉食の実態について、土器の分析を通して検討する必要がある、使用痕や付着物の科学分析を併用することで土器の機能について考えなければならない。

本稿執筆にあたり、山藤正敏氏（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）および岩井俊平氏（龍谷大学龍谷ミュージアム）には多くの御教示をいただいた。心より感謝申し上げる次第である。

## 註

- 1) 山内はこれまでのアク・ベシム遺跡の調査地点を整理し、発掘地点をAKB-0～18区とした（山内ほか 2019）。
- 2) 第1シャフリスタン（SH1）は、従来シャフリスタンと呼称されてきた長方形の区画であり、南西隅にはツイタデルがある。また第2シャフリスタン（SH2）とは従来「ラバト」と呼称されてきたSH1東側に接続する不整五角形の区画で、SH1の東壁を城壁の一部として共有している。SH2の中央部には従来、トルトクルと呼ばれた方形の中核部があり、唐の官衙と推測される。
- 3) 2020年1月のシルクロード学会ののち、表1の試料20～24のデータが追加されたことから、SH2の3つのピットのうち、1号ピットのデータが1世紀程度新しいことが判明した（帝京大学文化財研究所ほか 2020）。したがって土器群の様相は良く類似しているが、1号ピットは3・7号ピットより新しい資料となり、本稿では時期を区分し、土器群の見直しをした。
- 4) 半円筒土管は形態的に丸瓦に類似し、丸瓦の製作技法の影響で作られた可能性が考えられる。
- 5) 長頸壺A2については、サマルカンド周辺などのソグド地域で頻出する土器であり、ソグド人によってもたらされた土器の可能性が高いことを岩井俊平氏より御教示いただいた。

## 参考文献

- 間倉裕生・久米正吾・山藤正敏 2016「4.2.2.1 土器」『キルギス共和国チュウ川流域の文化遺産の保護と研究 アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡』36-44頁
- 榎原功一 2017「アク・ベシム遺跡 第2シャフリスタン出土の瓦」『2017年度 シルクロード学会 報告集』55-62頁
- 榎原功一 2020「アク・ベシム遺跡の土器と瓦」『2019年度 シルクロード学会 資料集』21-32頁

- 城倉正祥・山藤正敏ほか 2016 「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015年秋期）調査」『WASEDA RILAS JOURNAL』4 1-29頁
- 城倉正祥・山藤正敏ほか 2017 「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015年秋期）調査出土遺物の研究—土器・埴・杜懷宝碑編—」『WASEDA RILAS JOURNAL』5 145-175頁
- 城倉正祥・山藤正敏ほか 2018 「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015年秋期）調査出土遺物の研究—土器・瓦編—」『WASEDA RILAS JOURNAL』6 1-53頁
- 帝京大学文化財研究所・キルギス科学アカデミー 2018 『キルギス共和国国立科学アカデミーと帝京大学文化財研究所によるキルギス共和国アク・ベシム遺跡の共同調査2016』
- 帝京大学文化財研究所・キルギス科学アカデミー 2019 『アク・ベシム（スイヤブ）2017』
- 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー 2020 『アク・ベシム（スイヤブ）2019』
- 東京文化財研究所・キルギス科学アカデミー 2016 『キルギス共和国チュウ川流域の文化遺産の保護と研究 アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡』
- 山藤正敏 2017 「アク・ベシム遺跡ラバト地区出土土器の年代学的検討」『2017年度 シルクロード学研究会 報告集』47～53頁
- 山内和也・榑原功一ほか 2018 「2017年度アク・ベシム遺跡発掘調査報告」『帝京大学文化財研究所研究報告』第17集 121～168頁
- 山内和也・榑原功一ほか 2019 「2018年度アク・ベシム（スイヤブ）遺跡の調査成果」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集 131～203頁